

横浜スカーフ

マルカの遠藤さんと

ヌイトさん

スカーフ・蚕のお話



[前編]

この対談は 2021 年 2 月 14 日にたけのまにておこなわれました。

文中の内藤正、内藤春、大山は対談に同席したスタッフです。

録音協力：小林篤茂（Sunshine of Your Love LLC.）

イラスト：nuito

写真・文字起こし・編集・デザイン：favoris inc.



[左]

**遠藤洋平** えんどう ようへい

大手アパレルで MD を経験した後、丸加にてリテール部門に携わりオリジナルブランド [the PORT by marca] を立ち上げる。

[右]

**nuito** ぬいと

横浜生まれ仙台育ち。幼少期より生き物全般を愛す。特に虫、鳥好き。2013 年蚕に出会いその魅力に夢中になり、以後自宅にて毎年飼育。2020 年たけのまインターンになったことがきっかけで「たけのま×かいこ」プロジェクト開始。たけのままでの糸繰り体験などを通して蚕の魅力を伝えている。布、紙、木、糸など素材にこだわらずさまざまなものづくりやワークショップも開催している。なにかが生まれる瞬間に立ち会うのが喜び。

## 1 横浜の近代化を支えた蚕・生糸

nuito 今日はマルカの遠藤さんにお越しいただいています。よろしくお願ひします。

遠藤 よろしくお願ひします。

nuito 私は6年前から蚕を個人的に育てていて、たけのまでは今蚕の糸繰り体験というのをさせていただいているんですけども、蚕のことを勉強する上で、横浜といったらスカーフ、絹織物だったり、そういうところにつながっていくところがありまして、横浜スカーフは、その当時の一大産業というか……そういう話を聞きたいなと思ひまして。マルカさんは、創業何年くらいになるんでしょうか。

遠藤 今年で70年目になりますね。1952年に会社設立になりますので。

nuito 先ほど少し調べたんですけども、デザインから納品まで、一貫してされているのは横浜市内ではマルカさんだけというのをお聞きしたんですけども。

遠藤 その辺は難しい話なんですけど、私たちがどういったことをしているかという、自社で企画、生産、販売、立ち位置としてはメーカーという会社になるんですけど、販売までしていると、おそらく弊社だけといってもそんなに間違えてはいないんじゃないかと思ひます。ものづくりで、スカーフを作れるというのは、まだ数社ありますね。

nuito いまはどんどん減ってきたというのはあると思ひますが、当時は何社くらいあったんですか？1859年に横浜が開港して、スカーフというよりは、蚕そのものだったり、まだ生糸の段階で、輸出が盛んだったんですけど、そのあと関東大震災があって、戦争が終わった後くらいからスカーフが出だしたという認識なんですけど……。

遠藤 そうですね、では僕が知ってる歴史を、見たり聞いたりしている部分があって、当然自分が体験しているわけではないので、間違えてる部分もあるかもしれないんですが……横浜港が開港して、日本がすべきことは、まず外貨の獲得でした。そこで得た外貨によって、近代化、富国強兵、殖産興業なんていう、教科書にも載ってくる言葉があるんですけども、まずはそこですね。そして、生糸というのが非常にレベルが高かったというところから、主要な輸出品目として、外貨を稼ぐ、得た外貨で、近代設備であったり、技師、先生ですよ、を招聘したりとか、というのが一番のところの話。その生糸自体はどこから来たのかというと、関東一円からぐるっと、川や道を伝って下りてきて、集まるというところなんです。

製品になったスカーフの話でいうと、少し後の時代になるんですが、僕が聞いている話、見た話でいうと、当時、万国博覧会というものがあって、ウィーンやメルボルンにも、日本国として参加していく中で\*<sup>1</sup>、絹織物に、花鳥風月を描いた、手幅てはばと呼ばれる、ハンカチの原型と言われているものがありまして、それが大変好評を博したと、いうところから、スカーフみたいなものを作るようになっていくと。実際今たちがやっているスカーフというのは、当然生地はシルク、プリントの方法でいくと手捺染てなっせん、最近だとインクジェット等もあるんですが、僕らのスカーフは手捺染で作られたものが圧倒的に多くて、手捺染というのはいきなりそこから生まれたものではなくて、その前にもいろんな染め方があって、いろんな方にいろんな話を言われるんですが、今の型を使ってスケージで一色ずつ染めていくという手法\*<sup>2</sup>が確立されたのは昭和の初期と言われていまして、なので、およそ90年くらい。道具の材質は、当時は型は木枠、その内側にシルクの生地を貼っていて、その名残でシルクスクリーンなんて言い方をするんですけど、ぼくらは、シルクスクリーンと言わずに、型とっていることが多いですね。その後、型が鉄の枠になって、今は、アルミですね。中に入っているのは「紗（しゃ）」と呼ばれるものなんですけど、それは今はポリエステルとか、そういうものになっていっているという感じです。

nuito なるほど、それは軽量化ってということですか？

遠藤 そうですね、あとは耐久性があるとか。作りたいのは、最終的な製品がより優れているものなので、それに合わせた材料を使って、という感じですよ。

nuito そうですよ。手捺染の映像も見たんですけども、ほんとに、浮世絵の手法ですよ、一色ずつ重ねていって、一つの作品にするんですけど、製品によっては、何十色も重ねてつくるというやり方ですよ。

遠藤 そうですね、うちで今まで一番多色のものは、だいたい40色くらい。

nuito 40色！

遠藤 気が速くなるんですけど。

nuito そうですよ、すごく長い幅の布に職人さんが押していくところを見たんですけど、それを40色もやるということですね。

遠藤 そうです。同じことを40回。型と、色をちょっとずつ変えてやっていくんですけど。弊社の工場というのが、斜めの台になっていて、だいたい長さがブールと同じくらいなんです。

nuito へえ。では25メートル？

遠藤 はい、僕らは23メートルくらいで、片側を刷ったら、反対側を刷って、また戻ってくるというのを繰り返してやっていく作業ですね。

nuito 昔は手捺染は横浜だと川で洗っていたという話で、大岡川とか帷子川かたびらがわということなんですけれども、今はどこで手捺染されているんですか？

遠藤 今はちなみに、帷子川沿の捺染工場さんもあります。うちの製品に関していうと、自社工場が栃木県の足利、あとは一緒にずっとやってきている協力工場さんは東北の方に。70年だとか80年代前だと聞いてますけども、都市部で、いろんな仕事がある中で、なかなか工員さんが集まらなかったりとか、都市部での公害の問題だったり、あとは何よりお水が綺麗というのが大事なので、そういった部分で移られてます。移られた方とお話するんですけど、40年経っても、俺らは横浜の人間だって言い張ります（笑）。

nuito それはプライドなんですかね。横浜から来たっていう、横浜スカーフのプライドですよ。

この間お茶のインストラクターをされてる方とお話ししたんですが、輸出品で、生糸と並んでお茶も輸出品だったと思うんですが、横浜に、木枠を作る技師さんがとてもたくさんいたと、それからお茶のラベルを作る木枠を作る職人さんが、スカーフの木枠を作る職人さんになったという話も聞きました。

開港から急激な発展だったと思うんですが、そういう努力や広がりって、すごいですね。

遠藤 なかなかですよ。ぼくも、始めは横浜がそれで栄えるようになったみたいな、開港前は2、30戸の漁村だったと、横に浜が突き出ているから横浜、埋め立てであったり、そういうのを繰り返して今に至るという話だと思ってたんですが、先ほど言った富国強兵とか殖産興業とか、よく考えてみると全国なんですよ。横浜がではなくて、日本が、というふうに捉えたほうがいいのかというのがあります。先ほどお話しにできた、関東大震災の復興であったり、第二次世界大戦の戦後の復興というのやはり生糸の輸出によってなっていく\*3というのがすごい話だなというのが、スケールでかすぎてよくわからないという(笑)。

nuito たしかに。私は蚕を飼ってるので、養蚕のことについてもお話ししたいんですが、もともとなんで蚕を飼いだしたかという、すごく不思議な生き物だと思ったんです。家畜だということを教えてもらったときに「虫なのに家畜？」というのから始まって、蚕を飼い出したんですが、それから養蚕の歴史などを調べて、それこそ横浜だけじゃなく全国だという話をされましたけど、全国で養蚕というのはされていて、その時代いろんなところで養蚕と織物が発展していて、それが地に根付いているというのが不思議だったんです。地域によって虫とか生き物って、通常は住むところが違うじゃないですか。なんですけど蚕というのは、桑があれば全国どこでも飼えるっていうのがすごく不思議で、それが始まりだったんです。それから、こんなに人間と密になっている虫、生糸で日本が発展したのは80年くらいだったと思うんですが、80年間すごぎゅっと日本に寄り添ってくれていたというか、礎を築いてくれた虫なんじゃないかなという、それこそ壮大な話なんです。それがすごく興味があって始まりました。話を戻すと、マルカさんの蚕自体は、どこ産の？

遠藤 うちは、中国のものが多いですね。原材料という観点でいうと、カシミアの原毛なんかもそうなのですが、非常に品質が高いもので、生糸を中国で織って日本へ持ってくることもあれば、その生糸を輸入したものを日本で織られたものを使う、ただぼくらの場合は、原産国というのは製品にかかる話なので、製品としては日本製になるんですが、原材料としては中国の生糸が多いんじゃないかな。

nuito ブラジルが一番だという話を聞いたんですけども。

遠藤 それは品質の話？量の話？

nuito 量の話。

遠藤 量は中国が一番。圧倒的ですね<sup>\*4</sup>。

nuito 国産は一割ないですよ？

遠藤 ないですね。何年前かの資料を見たときに、養蚕農家さんが300戸とか200戸切るとかそういうような話で<sup>\*5</sup>。たまに原材料、シルクも日本なの？みたいな話をされることがあるんですが、使えることは使えるんです、ただそうすると、とっても高いものになっちゃって、そんなんだったらいらないって言われちゃうんだよなって思うと、僕らの場合はどこの原材料で作られたかというのも大事なんですが、途中お話ししたように、いいスカーフを作りたくて、いい材料を求めて、自分たちの目に合うものを使っていると。これは業界が違う話ですが、世界中から部品が飛んでくる「車」、出荷するときは日本車、では果たしてぼくらのスカーフは？横浜スカーフって言っちゃだめなの？と。

nuito そうですよ。

遠藤 だから、こだわることは大事なことだと思うんですが、何ををもって評価されているのかというのは、考えなきゃいけないことだなと、解釈しています。

nuito そうか、原材料が中国製だからといって、質が悪いというわけじゃない

ですもんね。

遠藤 ぜんぜん。

nuito なんか、イメージですよ。お肉とかだと、国産の方がいいわ、とかっていうのがあるので。国産って言われるとすごくいいものなんじゃないかと思うんですけど、現実には、養蚕農家さんも数えるだけですし、今は、繭を売っても割に合わないところがあると思うので、高齢化だったり、だから国産というのは難しくて。そういうのは悲しいですけど、現実としてあって。こうして蚕のことを知って、養蚕農家さんがもっと増えればいいなどは思うんですが、単純なことではなくて、次のことを考えていかなきゃいけないんじゃないかということに立っているような気がします。

## 2 スカーフとサステイナブル

nuito 糸織り体験というのを2020年の12月からやっているんですが、いろんな方がいらっちゃって、年齢もバラバラで、すごい小さい子とお母さん、あとは「懐かしい」という記憶を持っている方が来られて、そういう方は、糸織りをしているうちに色々な事を思い出すみたいなんです。この匂いだったわとか、桑を食べる音がこうだったわとか。

遠藤 雨降ってる感じ、とかね。わしゃわしゃね。

nuito そうなんです。そういう話を聞いていると、すごく特別なものではなかったんじゃないかなど。うちの母方の実家もそうなんです、稼業は別にあって畑もあったので忙しかったと思うんですが、蚕も飼っていて、うちの母の記憶では、大おばあちゃん、母のおばあちゃんですね、だいたい桑仕事って女性がするというのが主なんですけど、蔵の2階で飼っていて、それを土間で糸を引いて、それを織っていたという記憶がすごくあって、風邪を引いた時とか、おばあちゃんに真綿まわたを巻いてもらったわとか、繭を煮て作るのを真綿っていうんですが、くず繭で座布団をこさえたわとか、そういうふうにごく身近なものだったんじゃないかというのを上の世代の方からは感じて、皆さん懐かしいと言われます。小



さいお子さんとかは、逆にすごく新鮮なんですよ。最初は、糸きれいだねから始まるんですが、だんだんやっていくと、虫が透けてくるじゃないですか、虫が透けてきて、なんか出てきた、虫だったという新鮮な感性だったり、かわいそうという言葉と、野生で生きられないのって情けないと言った子がいて、それが新鮮で。そこまでじゃなくて、それから先、それで終わりではなくて、つなげていけたらなと思いつつやっています。

横浜市では、小学校とかだと昔はもっと、蚕が教材として使われてたそうなんですけど、やりましたか？

遠藤 やりました、やりました。

nuito 今はやはり手間がかかるっていうのがあるのか、やらない小学校が増えてきて。もちろんシルクセンターなどではいつもワークショップとかができるんですけど、そこで終わりではなくて、もっと疑問とか、触った気持ち良い感じとか、そういう体験を次に、例えば他に糸を吐く虫はいるのかなとか、この糸から作っているのはなんなのかなとか、蚕を飼うことで終わりではなく、おばあちゃんに聞いてみようかなとか、桑ってどこにあるのかなとか、ここを始まりとして、いろんなところで興味がいってくれるといいなと思いつつやっています。

横浜スカーフさんは、私のイメージだと「伝統的な」というイメージがすごくあって、ちょっと敷居が高いというような……。

遠藤 いやいや、そんなことはないですよ。

nuito やはり高級品というイメージと……。

遠藤 高級品は高級品ですよ。

nuito あとは横浜らしい美しい絵柄という印象がありますので、その敷居が高いというのも変ですけど、もうちょっと身近に、それこそ蚕が生活の中にあつたように、スカーフももっと身近になっていけば、直接養蚕農家を救う、増やすことにはならないのかもしれないんですけど、そういうふうになっていけばいいなと思っています。

遠藤 僕は、母方の祖父が始めた仕事でもあって、単純にもっと、きれいなものとかどちらかというファッションとかも好きだったので、入り口はそっちではあったんですが、入社して、工場さんを色々見て学んでこいということでプログラムが組まれていて、それこそ捺染工場だけじゃなくて、そのあと水洗整理\*<sup>6</sup>や機織りも見学しました。機（はた）として織られる前ってお蚕さんなんですけど、その紡績工場も拝見して、お蚕様が出てくるようなところを見て、今でもそれが忘れられなくて、あ、これって命いただいて作ってるものなんだなというのが、業の深いというか、大事に使わなきゃいけないし、それをいいものに昇華するというのが、僕らの使命、使命というところとちょっとカッコつけすぎなんですけど、やるべきこと、役目かなというふうには思いますね。

昨今で言えば、サスティナブル、洋服とか、作っても半分捨てちゃうとか、作りすぎちゃだめだよねというのがあると思うので、僕らも作ってはいるかもしれないんですが、余して捨てるようなことはまずないですし、あとは作っているとどうしても生地が傷があったりとか、当然天然繊維というか、生き物の吐く糸で作られていますから、節があったりとか、あとはプリントの部分でのちょっとしたミスというのが避けられないんですが、それはスカーフとしては販売は難しいので、全然違うもの、例えば最近すごく人気なのが、シルクのスカーフで作ったポーチとか。

nuito なるほど。マスクとか？

遠藤 最近はマスクとかも作りますけど、シルクでいうとポーチと巾着かな、すごく人気ありまして。中綿いれて、綿の余地布いれるんだけど、プリント自体がスカーフってきれいなものなんだけど、それで触るとお布団みたいにふかふかしていて、めっちゃ気持ち良くて。

nuito いいですね。

遠藤 持ってくればよかったですって思ったんですけど。こういう話になると思わなかった。

nuito すごい触りたかったです。スカーフ単体ではなくて、いろんなものを持つことですね。

遠藤 それって、いただいた命を大事に使うというか、サスティナブルっていう言葉は2、3年前から言われていて、自分たちのものばかり作るわけではないので、自分たちはそういう意識は持ちながらも、そういうものづくりをしてほしいっていうお客様からは、エコとかサスティナブルとかないの？と言われるので、僕らもそういう提案をしたりはするんですが、無駄遣いしないで売れる量をきちんと作れたらいいと思います。あんまりにもサスティナブルってずっと言われていて、行きついたのが、いただいたものを大事に使う気持ちを持つっていうのが、よっぽど持続可能性があるというか、無駄遣いしないほうが大事だなと思うと、いただきますの精神はすごい大事だなっていうのは、最近のサスティナブル関連では僕の中では一旦腹落ちして。もういいかなと。あとは一生懸命自分たちがやりたいことをやりたいねという。

nuito やはりファストファッションとかそういうのを、今すぐくそういう流れに、サスティナブルって一言で言ってしまうとそうなのかもしれないですけど、意識がある方はそういう風になってきたかなというのはありますね。

遠藤 あとは、地産地消というところから、ローカルのものを愛するとか、移動もなかなか難しい環境でそういう目線とか。

一番最近嬉しかったのは、これは毎年ありまして、スカーフってなかなか、高級なんじゃないかっていう、自分のものじゃなかろうっていうのがあったりとか、しかも今こんな時期だから、買い控え、みたいな、お出かけもできないしと言われるんですけど、そういった中でもギフトだったりとか、自家需要（編注：ご自身用）でお客様がいらっしゃるんですが、もう少しすると4月になって、新卒の子達が、初めてのサラリーでうちの店来て、お世話になった先生とか、お母さんに、感謝の意、みたいな。

nuito 泣いちゃう。

遠藤 結構ぐっとくるでしょ。しかも男の子だったりするんですよ。「僕横浜の人間で、ずっと、働き始めたらお母さんにスカーフを」みたいな。嬉しすぎる、みたいな。

nuito ついていって渡すところまでみたいですわね。

遠藤 見たい、見たい。

nuito 何て言って渡すのかね。

遠藤 今はなんか具体的な行動してるのかっていうと難しいんですけど、もっと横浜の方に、スカーフ、シルクを身近に感じて欲しいと思っているんですが、50歳以上の方なんかは、スカーフとかシルクっていうのは横浜と密接にあるというのは、生きていの中でそういう時代があったりとか、僕自身は味わってないんですけど、ハマトラとか流行った時というのは、みんな巻いてたらしいんですよ。そんな時は、うちもハイエース2台に、満杯に、スカーフって、こんなもんで100枚なんですよ、これでこれで100枚みたいな、それで満杯ですよ、毎日。

nuito すごいですね、染める方ももう、こんなですよ。

遠藤 もう、いや、そこは丁寧（笑）。そこはめっちゃ丁寧にやってるんですけど（笑）。

nuito すいません（笑）。でも、目が回る忙しさですよ。

遠藤 そうですね。ほんとにたくさん作ってた時代って、型ってあるでしょ、一つの柄で1万枚とか刷るんですって。そうすると、よーいどんで作らないと間に合わないって言って、同じ柄の型、普通は、今はぼくらは一つの柄の、型は色数分って持ってるんですが、それを3セット用意して、工場さんA、B、Cみたいな感じで、赤い配色はお宅、青い配色はお宅、みたいなそれで作っていたそうです。うそでしょ？みたいな。

nuito それぐらい分けないともうって感じだったんですね。

遠藤 それが、1品目がね。それだけ売っているわけじゃないんで。すごい枚数。だから、横浜の高島屋さんとかでポップアップイベントをすると、ご年配のお客様なんかいろいろなお話を伺うんですが、よく出てくるのが、友達のだれそれさんのお母さんが縫ってたわとか。

nuito 縁<sup>ふち</sup>をですよ。

遠藤 僕はもうその話とか、100回くらい聞いていて。同じ人にじゃないですよ、いろんな人から伺いました。

nuito でもほんとに割のいい内職だったって聞きました。

遠藤 ほんとにそれだけ、横浜一帯でスカーフ作ってたんですよ。今やってる方達は、一番若い人でも50代じゃないかな。その方達が学生の頃に、お母さんがその仕事をやって、手伝うとお小遣いをもらえたからやってたと、その人が今もやってたりとか。けっこう根気の要る仕事で、スカーフって一般的なサイズで90センチ角、うちは88センチ角になってるんですけど、約3.6メートルくらいのかな、それを、いいスカーフって言ってるものは、手で巻くんですよ、縁を。今でもそれはちゃんと守っていて。ただミシンでもやってるものもあります。これはどっちがいいとか悪いということではなくて、どっちも大事な仕事で、例えばミシンの縁巻きっていうのは千鳥巻きっていう巻き方をするんですが、これは実はよその地域行っても、無いんです。厳密にはあるんでしょうけど、100っていうとあれなんで。縁を3.6メートル丸めながら縫っていくんですが、どのくらい時間がかかるか知ってます？一枚縫うのに、縁がどのくらいの時間をかけて作られるか。

nuito どのくらいだろう……。1時間はかからないかな。手で縫うんですよ。

遠藤 縫うんじゃないくて、巻くの。指の腹で丁寧に丸めながら針を進めるんです。

nuito スカーフ1枚分てことですね。

遠藤 何分でしょう。

nuito えー、45分。

遠藤 なるほど、それだと割に合わない仕事になっちゃうんです。だいたいうちの巻き子さん、内職さんは、だいたい20分から30分。

nuito えー。

遠藤 手の良い方だと、20分くらいだっけ聞いたことはあって、いま聞くと、30分かかるかどうか。だから1時間で1枚2枚の世界で。

nuito これは絹糸で？

遠藤 今はそこはテトロンです。シルクでやる場合も当然あるんですが、さっき言った通りで、道具というのは進化していて、やはりテトロンの方が強度があるというか、切れない。シルクでもできるんですが、切れちゃったりとか。

nuito ここなんてすごい細かい。この終わりっていうんですか。

遠藤 そうですね。それも、スカーフを形作る大事なディテールですよ。

nuito そうですね。未だにこうやって手でやってる方がいるんですね。

遠藤 はい。内職仕事でどんどん人も減っていったんですが、誰でも巻けるかといったらやっぱり巻けなくて、10人いたら、残る人って、2、3人。根気の要る仕事でもあるし、あとは本人がやりたくても、製品として販売しなきゃいけないじゃないですか、そうすると、手の良し悪しでできちゃうんですね。

nuito なるほど。このスカーフは、私が思ってる伝統的な横浜スカーフっていうよりは、現代的な。

遠藤 今日はそっち系あまり持ってこなかったな。クラシックでいうと、このベイズリーなんかも。これは男性向きですね。

nuito カッコいい。これは裏もカッコいいですね。

遠藤 これは、リバーシブル用に裏ももう一回刷ってるんです。

nuito 刷ってるんですね、なるほど。



**内藤正** これでいくらくらいするんですか？

**遠藤** これで、この類はいま出してなくて、このサイズで生地も多少厚いもの、で手巻きのものっていうのは大体1万2千円から1万5千円くらい。

**nuito** 手巻きのこととか、デザインのことを考えたら安いですね。すごい、細かい。

**内藤正** ヌイトさん広げてもらっていいですか。これめちゃめちゃカッコいいですよ。

**nuito** 裏もこういう風になってるのって絵もこっちに通ってるっていうのがすごい素敵。リバーシブルってできるんですね、初めて知った。

**遠藤** 大変なんですけどね（笑）。一色だから簡単っていうのもないんですよ、捺染は。

### 3 CILK（シルク）について

nuito そうそう、ファッションの話でのつながりなんですけど、シルクのSがCになったCILK（シルク）\*7っていうプロダクトをやられてるっていうのを拝見して、あれすごい素敵でした。

遠藤 ありがとうございます。あれはまさしく、シルクって言われると高級だとか、良い意味なんだけど、敷居が高いと言われてしまう部分を、もうちょっと日常使いできるものにできたらいいねというところから関東一円で6社集まってスタートしたもので、いまちょっとコロナなので足踏みしている状況なんですけど。楽しいですね。カジュアルのCなんですよ。

nuito それもすごい素敵だなと思ったし、コットンと合わせて配分を変えて色んな生地を作られてたり色見本じゃないですけど、シルク見本みたいな。それと、どうしても天然の繊維なので紫外線だったりとか、使っているうちに変化してしまうというのを劣化ではなくて変化ということで捉えているんなことをされているということで、土に埋めるという。

遠藤 パリに持って行った時のやつですね。

nuito あれがすごい面白いなと思っていて。デニムとかもありますよね、土に埋めて、白カビ生えさせて穴を開けるみたいなの。それがちゃんと産地に埋めるんですね。

遠藤 あれは、たしか富士山の麓です。あれは死にかけたって言っていました笑。僕は行ってないんですよ、一緒にやってるチームの人間が。

nuito 掘り起こす時に？

遠藤 雪降っちゃって（笑）。パリ行ったのが2月で、だからそんな時期ですよ。1ヶ月埋めようって言って。



nuito ちょっと逆算しなかったんですか（笑）？

遠藤 そこまでね、ぼくらのものづくりって、長い長いスパンでやれるものもあれば、ぱぱってやってかなきゃいけないものもあって、シルクって、時間は取れると思うんですが、そういったことをエキストラでいれるとなると、発表するタイミングってあるじゃないですか、そうすると、あんまり時間ないね、みたいな。これはちなみにそのシルクで作っていて、

nuito あの、綿と。

遠藤 これはだからノイル<sup>\*8</sup>、野蚕<sup>\*9</sup>かな、で作ってて。それをうちでプリントして。クラッチですね。（編注：前頁写真で遠藤さんの手元にあるもの）

nuito あとでプリントしてってことですね。素敵。

内藤正 粗いんですか？

遠藤 粗いです。ノイルって言って、野蚕のシルクで。

nuito 100パーセントですか？

遠藤 ちょっと他のものも入ってるんじゃないかな。

内藤正 粗いリネン的な。ヨーロッパのリネンに似てる。

nuito シルクって感じではないですよ。

内藤春 洗えるんですか？

遠藤 これは洗っても大丈夫じゃないかな。

どこに価値を置くかって話で、僕もちょっと驚愕だったんですが、イベントとかで店に立つと、ちょっとキャラ立ちした方の接客をした時に、びっくりしたのが、グッチのスカーフ、5、6万するんですけど、家でガンガン洗います、みたいな。

ぼくらが家庭洗濯向かないですよって言うてるのって、取り扱いがすごく難しいんですよ、シルクって。実際手洗いする方法はあるんだけど、みんなにそれができますとは言えないもので。会社ごとに基準を持った中で洗濯の絵表示を決めて、だから買った時の見た目とか色んなものを損なわずに長く使えるっていう意味で洗濯絵表示っていうのがあるんですけど、例えばデニムみたいに色落ちして当たり前というものとして、スカーフをやって行って、ガシガシ使ってちょっと褪せてきたとか染みができたとかそういうのも含めて良しとされるんだったら、全然やっちゃっていいんじゃないですかという感じ。

**内藤正** 昔とか言わなかったですもんね、ジーンズとか特に。ダメージはダメージで、加工は加工。変化を楽しんでくださいって今は普通にいうけど、昔はそのフレーズを言ってないんですよ。

**遠藤** 僕は15年くらい前に4年間だけアパレルにいたんですよ。当時まだデニムってデニム会社さんが作る、例えばリーバイスとか、そういうもので、アパレルさんとかそんなに作らなくて。大手のアパレルに勤務してたんですが、お客様からの要望で、ここのブランドはデニムないのっていう話でじゃあ作るかみたいになるんだけど、作って検査出すわけですね、生地を試験。そうすると検査室から電話があって、遠藤さん大変です、試験で落ちちゃいましたと、どういふことなんだろうと思って行ったら、色落ちが激しくて、といやいや、デニム色落ちするじゃないですか、みたいな(笑)。まだ15年前とかまだそんな時代。そのあとシルクなんかも、シルクを着るってことがなかったわけじゃなくて、お洋服として販売するっていう意味でいうと、この10年前後くらいなのかな。色んな意味で買った後の取り扱いというのが上手にお伝えできるようになっていったのっていうのがそれくらいの感覚なのかなという気はします。

**nuito** CILKは、お洋服も作られてますよね。

**遠藤** そうですね。

**nuito** あれも素敵だったな。それこそ野蚕のじゃないですけど綿が混ざっているからか、光沢感だけではなくて、すごいカジュアルな感じがいいなと思っていて。コロナが早くどうにかおさまってまたできるといいですね。

[後編につづく]

★1

ウィーン万国博覧会は、1873年5月1日から11月1日までオーストリア・ウィーンにて開催された国際博覧会。メルボルン万国博覧会は、1880年10月1日から1881年4月30日までオーストラリアのメルボルンで開催された国際博覧会。

★2

手捺染の手法では、染めには「型」と「スケージ」と呼ばれる大きなヘラを使い、型の下の部分に染料を流し込み、スケージで染料をすくい一色ずつ丁寧にスケージを使って上から下へ捺染していく。捺染用の型は、使用する色数の分だけそれぞれ分けて作成される。出来上がった型を「スクリーン」と呼ぶ。型に張る薄手の「紗(しゃ)」と呼ばれる生地は、その昔はシルクを使用していたので今でもその名残りで「シルクスクリーン」とも呼ばれている。

★3

輸出が始まった幕末から明治、大正、昭和の戦前までの80年弱、生糸は日本の総輸出品目の中で常に第一位。明治期には輸出総額の生糸類輸出額の占める割合は、60%～40%であった。また、それらの生糸類のほとんどは横浜港から出ていった。

★4

世界の生糸生産の8割は中国が占めている(2018年)。

★5

1929年ごろのピーク時に養蚕農家は221万戸、繭生産は約40万トンあったのが、2018年には293戸、110トンであった。

★6

水洗(洗い)。水洗整理とは、蒸しの工程で乾いた糊を落とし、色落ち等を防ぐためしっかりと洗い流していくこと。水洗整理を経て、プリント生地として仕上がる。

★7

cilk : <http://cilk.shop/>

★8

ノイルとは製糸・紡績工程で出る副産物を再利用した糸で、ナチュラルで素朴な表情を持つ。

★9

野蚕とは、野生の蚕のこと。家畜化された蚕(家蚕)の対義語。野生の蚕からとった絹糸をワイルドシルクという。